

我が国の伝統音楽を取り扱った授業に関する研究

—『教育音楽 中学・高校版』の分析を通して—

大 井 絃

(本講座大学院博士課程前期在学)

Study of Japanese Traditional Music Classes: An Analysis of *Kyoiku Ongaku: Tyugaku Kokou Ban*

Gen OI

Abstract

In recent years, the importance of Japanese traditional music in music education has increased. This study focuses on Japanese traditional music classes that music teachers has created from 1998 to the present. The concrete content of these classes is investigated and analyzed to identify content trends. I analyzed the contents of classes covered in the book *Kyoiku Ongaku: Tyugaku Kokou Ban*. Analyzing classes that were the subject of survey from the viewpoint of class composition and positioning activities using Japanese musical instruments, it became clear that such classes can be classified into two types. The first type of class is concerned with Japanese traditional arts and local music culture, with the goal of understanding it properly and to develop human resources who can inherit culture. And activities using Japanese musical instruments are the means to the goal. The second type is target some kind of Japanese musical instrument, and not only focus on mastering performance skill, but also try to foster an appreciation of Japanese music culture by making students aware of the characteristics of Japanese music and the tone peculiar to Japanese traditional instruments.

1. はじめに

(1) 研究の背景

我が国の音楽科教育は、明治の学制以来、カリキュラムの中心は西洋音楽であった。しかし昭和44年度改訂の中学校学習指導要領では、指導計画の作成と各学年における内容の取扱いの項目において、我が国の伝統音楽に関する内容が新たに追加された。この改訂によって我が国の伝統音楽を授業で扱う際の留意点が詳細に記述されて以来、現在に至るまで、学習指導要領における我が国の伝統音楽の学習に関する記述は徐々に増加している傾向にある。特に平成10年度の改訂では、和楽器について、中学校3年間を通じて1種類以上の楽器を用いる、という内容が追記された。

このような近年の状況において、現場では様々な戸惑いや混乱があった、あるいは今も続いているであろうことは容易に想像することができる。

(2) 研究の目的

筆者はこれまでに、学校教育における我が国の伝統音楽に関する研究論文・報告の動向に関する調査を行ってきた。調査の対象期間は平成10年度の学習指導要領改訂以後から、平成27年度までである。この研究で、過去17年間で発表される論文・報告の総数が大きく増加していることから、音楽科における

我が国の伝統音楽に関する領域が研究の対象として重要性を帯びていることが明らかになった。また論文の内容の内訳は、1998 年からの数年間では、伝統音楽や和楽器を授業で扱う「意義・在り方」に関するものが多かったが、2005 年頃から徐々に減少し、より具体的な「授業実践」に関するものが増加（図 1）、2008 年から 2015 年ではほとんどが授業実践研究であるという結果を得た（図 2）。

この結果をふまえ、本研究では、特に「授業実践」に焦点を当て、平成 10 年から現在に至るまでの我が国の伝統音楽を扱う授業実践の具体的内容を調査・分析し、内容の動向について明らかにすることを目的としている。

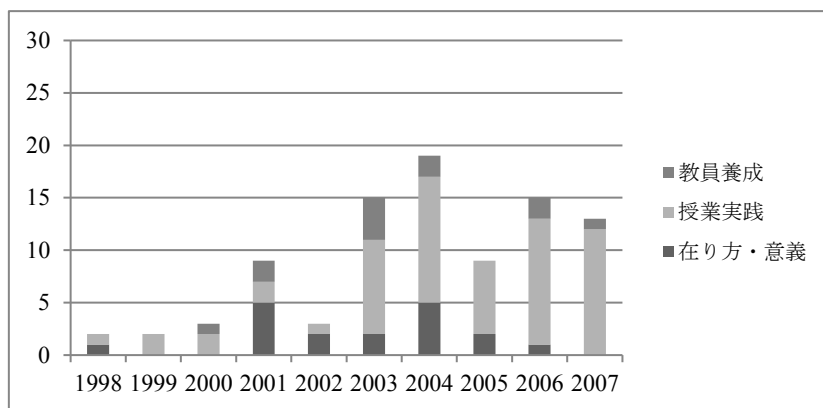


図 1 我が国の伝統音楽に関する研究論文・報告数（1998～2007）

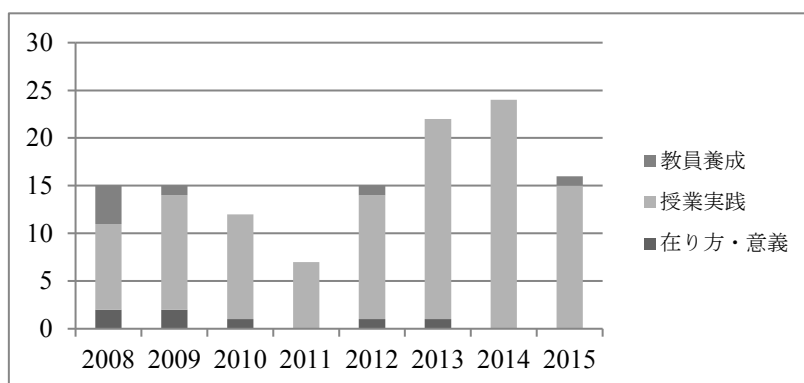


図 2 我が国の伝統音楽に関する研究論文・報告数（2008～2015）

（3）研究の方法

本研究は、雑誌『教育音楽 中学・高校版』を主たる資料とし、本書中で取り上げられた授業実践、及びそれに関係する指導法の解説や教材化に言及した記事を抽出し、内容の分析を行う。特に和楽器の実技を含んだ授業を対象とし、校種は中学校、対象期間は平成 10 年度の学習指導要領改訂以後から、平成 27 年度までとする。

『教育音楽』は 1946 年 12 月に創刊され、現在に至るまで継続して発刊されている雑誌である。菅(1999)は『教育音楽』に関して、通史的に音楽教育の動向をみる事ができるものであるとしている。

また雑誌を創刊したのが、当時学校教員や音楽家、音楽評論家などを含む、9800 人もの会員をかかえ、教育実践の促進と啓蒙活動を幅広く行っていた「教育音楽家協会」である点や、同時期に発刊されていた「音楽教育連盟」の機関誌『音楽手帖』が 1950 年 5 月で休刊しているのに対し、『教育音楽』はその後も継続しており、現場への現実的な影響力も強かったと予想されるといった点からも、音楽教育実践の一般的動向を把握するうえで『教育音楽』を分析対象とすることは有効であると述べている。

2. 授業実践の分析

(1) 授業実践の概要

1998 年から 2015 年までに取り上げられた中学校音楽科授業実践のうち、和楽器を用いた表現活動を含んだものは以下の通りである（表 1）。

表 1 和楽器を用いた中学校音楽科授業実践の報告（1998～2015）

	授業者	掲載年	使用和楽器	教材	学年
1	石黒賢	2000	箏	雅楽	1
2	稲田待子	2000	箏	さくら，六段の調べ，校歌	2
3	橋本牧	2000	篠笛	こきりこ節	3
4	藤原みつる	2001	篠笛	岡崎の子守歌	1
5	御須友子	2002	篠笛，大太鼓 締め太鼓，当たり鉦	岩沼の獅子舞 怒涛いなさ太鼓	1
6	沼田幸子	2002	能管，小鼓，太鼓	能	3
7	高橋実	2002	篠笛，大太鼓 締め太鼓，当たり鉦	若山流江戸囃子	2
8	副島和久	2002	箏	さくら	1
9	尾澤栄一	2002	大太鼓，締め太鼓，鉦	郷土の祭り囃子	2
10	金光元子	2003	龍笛，箏，笙 和太鼓，締め太鼓，鉦	雅楽	1
11	永志保	2004	三味線，チヂン	シマ唄	3
12	原佳織	2004	龍笛，箏，笙，楽箏 釣太鼓，鞆鼓，鉦鼓	雅楽	1
13	工藤雅丈	2004	笛，太鼓，三味線	ねぶた囃子	2
14	桐ヶ窪牧子	2004	龍笛，箏，笙	雅楽	1
15	山本衣美子	2004	龍笛，箏，笙，釣太鼓 鞆鼓，鉦鼓，箏，三味線	雅楽，さくら	2
16	山下悠生	2005	三味線	さくら	2
17	寄原洋子	2005	箏，尺八	春の海	3
18	入山克巳	2007	箏，三味線，大太鼓 締め太鼓，当たり鉦	雅楽，黒田節，こきりこ節 ソーラン節 結城ばやし，花笠音頭 よさこい結城，磯節	1, 2, 3
19	古川敏子	2007	箏，尺八，和太鼓	日本歌曲 韓国の伝統音楽 ポピュラー音楽	2, 3
20	佐藤美智子	2007	箏，尺八，和太鼓，篠笛	つき，荒城の月 かごめかごめ，さくら	1, 2
21	宮永典子	2008	篠笛	さくら	2
22	渋谷政枝	2010	長胴太鼓，締め太鼓，鉦	祭りの一日	1
23	三輪章人	2010	和太鼓	なぎなた太鼓	1
24	森口裕子	2010	箏，和太鼓	さくら	3
25	緒方浩二	2012	篠笛	日本歌曲，わらべ歌 ポピュラー音楽	2
26	安次里絵	2013	箏	さくら	1

(2) 授業実践の分析

これらの授業実践で使用された和楽器として最も多かったのは「箏」である。10 件の実践例で扱われている。選択理由として、誰でもすぐに音を出ることができる点が挙げられる。尺八や篠笛のような管楽器は、表現活動を行う以前に、音を出すこと自体に技術を要する。また同じ絃楽器でも三味線のように自分で音程を作らなくても、あらかじめ調絃を行っておけば、正しい音程を演奏することができる。結果として、より高度な表現活動に時間をかけることが可能になる。副島（2002）はこのような箏の特性を生かし、箏を用いた創作活動を行っている。次に多く使用されていたのが「篠笛」である。7 件の実践で扱われている。篠笛を扱う利点は、生徒全員に楽器を割り当てることができることである。橋本（2000）の実践では、塩化ビニール管を加工し篠笛の代用楽器を学年全員分作成している。これによって生徒一人ひとりが楽器に触れる時間を増やすことに成功している。またプラスチック製のものでは比較的安価で購入可能である。宮永（2008）は生徒にリコーダーの代わりに篠笛を持たせている。楽器の選択はこのような楽器の特性を考慮して行う場合と、雅楽の実践における龍笛、篳篥、笙、楽箏、釣太鼓、鞆鼓、鉦鼓のように教材に合わせて行う場合があることが読み取れる。

教材曲として多く選択されていたのが「さくら」である。生徒にとって耳なじみがあり、平易なことが選択理由として挙げられる。また箏の学習を行う際に導入として必ずと言っていいほど取り上げられる。次に多く取り上げられているものに「雅楽」がある。合奏を行うとなると多くの楽器が必要となり、手配が困難であるにもかかわらず多くの実践が行われている背景には、鑑賞領域と関連させた授業構成がある。雅楽は鑑賞領域においても重要な教材である。しかし日本音楽に接する機会が少ない中学生にとって CD・ビデオ鑑賞中心の雅楽の授業は「つまらない」「よくわからない」などの消極的な印象を受けやすい授業でもある。金光（2003）はこのような状況に問題意識を持ち、全 5 時間で表現活動と鑑賞活動を交互に行う授業実践を行っている。鑑賞後に表現活動に進むことで、生徒は映像で見た楽器に実際に触れることができる。結果として生徒の意欲を引き出すことにつながる。さらに表現活動を行った後、改めて鑑賞を行うことで、より多くの音楽的要素を感受することができる。このように表現領域と鑑賞領域が関連しあい相互に良い作用を生む実践を行っている。

(3) 和楽器の表現活動を視点とした授業構成の分類

本研究で調査対象とした授業実践を、授業構成と和楽器の表現活動の位置づけを視点に分析すると、大きく 2 つのタイプに分類できる。

第 1 のタイプは、日本の伝統芸能や郷土の音楽文化に出発点を置き、その正しい理解や、継承していくことができるような人材の育成を目的とし、その手段として和楽器の表現活動を位置づける授業構成である。今回調査した授業実践では、まず、能、雅楽、地域の祭りで使われる囃子などを授業の中心に置き、それに関し、歴史を学ぶ、生の演奏を鑑賞する、声のパートを歌ってみる、など様々な角度からアプローチしていく。その中で理解を深める一手段として、実際に和楽器を使って演奏する、という活動を盛り込んでいる。地域の伝統音楽をそのまま教材として授業に取り入れることで、生徒は授業で扱っている教材と実生活が強く結びついていると意識するであろう。日本の伝統芸能や郷土の音楽文化に理解を深める一方で、和楽器に関しても、普段触れる機会にない異文化に近いようなものではなく、自国の文化として意識し、普段の生活の延長線上にある身近な存在とすることができるのではないだろうか。しかしこの授業構成の場合、和楽器の練習だけに多くの時間は割けず、演奏技術の熟達というよりも、体験的な学習のみに留まってしまう場合がある。

第 2 のタイプは、何らかの和楽器それ自体を対象とし、その演奏技術の熟達をはかる中で、日本音楽の特徴、和楽器特有の音色等を感じさせ日本人が持つ内なる「和」に働きかけることで、自国の音楽文化を愛好する心情を育もうとする授業構成である。多くの時間を和楽器の練習にあてることができるため、その楽器に関して、奏法や、曲のレパートリーなど深く学ぶことができる。また器楽の一つといった位置づけに近い場合、創作活動に使ったり、西洋の楽器とアンサンブルを行ったりと、授業構成の幅が広い。教師は生徒に対して、今扱っている楽器が、他国の様々な楽器と並列のものではなく、自国の文化の一部であることを忘れさせないような働きかけを行う必要がある。

3. 我が国の伝統音楽を授業で扱う際の障害

これらの授業実践の報告からは、多くの実践者が我が国の伝統音楽を授業で扱う際に大きく2つの問題に直面していることが読み取れる。

第1に、音楽科教員の専門性の問題である。多くの教員が我が国の伝統音楽を専門としておらず、授業を行うための十分な知識・技能を有していない。そのため、我が国の伝統音楽を授業で扱う際には、最初に教師自身が何らかの方法で授業を行うに足る知識・技能を学ぶ必要がある。また西洋音楽を専門に学んでいるがゆえに、無意識のうちに日本伝統音楽を西洋音楽の文脈で解釈しようとして混乱する場合がある。三輪（2010）の実践報告では、和太鼓の音を最初4拍子の楽譜でとらえていたが、いざ専門の指導者につくと「ドコを8回たたいたら、ドコドンで3回です。」と教えられ衝撃を受けた、という体験が紹介されている。また桐ヶ窪（2004）は、和楽器特有の音高を西洋音楽の五線譜上のピッチで聴いてしまい、単純な旋律を複雑にとらえてしまう、という経験を報告している。この問題に対し、多くの実践者は、自らプロの演奏家を尋ね、直接指導を受けることで乗り越えている。このことから、問題の解決策として、教師は独学で知識・技能を獲得するだけでなく、できるだけ多くの時間、実際に「本物」の伝統音楽に触れることが有効であると考えられる。また、この問題に関連して、ゲストティーチャーを招き授業を行っている実践が13件あった。このような工夫は教師の技能不足を補うことができ、加えて地域の指導力を学校に取り入れることにもつながる。しかし一方で、ゲストティーチャーに任せきりになってしまうという危険も考えられる。授業として成立させるために、教師がしっかりと教育的意図を持ち、全体をコントロールしていくことが必要である。

第2に、環境整備に関する問題である。つまり、必要な楽器数をいかに確保するか、ということである。この問題に対しては、安価な素材で自作する、という解決策のほかに、工藤（2004）の実践では、地域の人々または近隣の学校から借用する、福島（2002）の実践では、複数人で一つの楽器を交代しながら使う、金光（2003）の実践では、数種類の和楽器で合奏する場合に足りないものを西洋の楽器で代用する、石黒（2000）の実践では、アルトリコーダーの代わりに簞箏を購入させるなど、学校の状況に即した様々な解決策が実施されている。

4. おわりに

平成10年度学習指導要領改訂で、和楽器について、中学校3年間を通じて1種類以上の楽器を用いる、という内容が追記され、10年以上が経過した今、現場では多くの教員が独自の方法で困難を乗り越えてきたことが明らかになった。現場での取り組みが多様化している現在の状況において、改めて我が国の伝統音楽を授業で扱う意味を考えつつ授業構築を行っていく必要があるだろう。

引用・参考文献

菅道子（1999）「戦後改革期における音楽科の学習構成の展開—雑誌『教育音楽』の内容分析を中心として—」日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第25巻，pp.119-127

『教育音楽 中学・高校版』

石黒賢（2000）「世界の諸民族の音楽や我が国の伝統音楽に親しもう」第44巻（第4号，pp.110-111；第5号，pp.104-105；第6号，pp.100-101；第7号，pp.100-101）

稲田待子（2000）「日本の音楽に親しもう～発見！箏の魅力」第44巻（第4号，pp.108-109；第5号，pp.102-103；第6号，pp.98-99；第7号，pp.98-99）

橋本牧（2000）「日本の音楽を楽しもう」第44巻（第12号，pp.92-93），第45巻（第1号，pp.94-95；第2号，pp.100-101；第3号，pp.102-103）

藤原みつる（2001）「竹の楽器で音楽しよう」第45巻（第8号，pp.102-103；第9号，pp.100-101；第10

- 号, pp.100-101 ; 第 11 号, pp.102-103)
- 御須友子 (2002) 「自己表現力を高める指導法の工夫」第 46 卷 (第 1 号, pp.106-107 ; 第 2 号, pp.102-103 ; 第 3 号, pp.102-103)
- 沼田幸子 (2002) 「能に親しもう」第 46 卷 (第 4 号, pp.98-99 ; 第 5 号, pp.110-111 ; 第 6 号, pp.100-101 ; 第 7 号, pp.94-95)
- 高橋実 (2002) 「お囃子の楽しさ・おもしろさを感じて演奏しよう」第 46 卷 (第 8 号, pp.94-95 ; 第 9 号, pp.94-95 ; 第 10 号, pp.94-95 ; 第 11 号, pp.94-95)
- 副島和久 (2002) 「学級オリジナルの箏曲を創ろう」第 46 卷 (第 8 号, pp.96-97 ; 第 9 号, pp.96-97 ; 第 10 号, pp.96-97 ; 第 11 号, pp.96-97)
- 尾澤栄一 (2002) 「郷土芸能・お囃子にチャレンジしよう」第 46 卷 (第 12 号, pp.94-95), 第 47 卷 (第 1 号, pp.104-105 ; 第 2 号, pp.96-97 ; 第 3 号, pp.94-95)
- 金光元子 (2003) 「日本の伝統音楽に親しもう」第 47 卷 (第 4 号, pp.98-99 ; 第 5 号, pp.98-99 ; 第 6 号, pp.98-99)
- 永志保 (2004) 「郷土の素材を生かした授業づくり」第 48 卷 (第 1 号, pp.96-97 ; 第 2 号, pp.94-95 ; 第 3 号, pp.94-95)
- 原佳織 (2004) 「雅楽の魅力を味わわせたい」第 48 卷 (第 1 号, pp.100-101 ; 第 2 号, pp.98-99 ; 第 3 号, pp.98-99)
- 工藤雅丈 (2004) 「郷土芸能を元にした和楽器の指導」第 48 卷 (第 4 号, pp.86-87 ; 第 5 号, pp.80-81 ; 第 6 号, pp.80-81 ; 第 7 号, pp.78-79)
- 桐ヶ窪牧子 (2004) 「伝統の響きを新しい感性で」第 48 卷 (第 8 号, pp.78-79 ; 第 9 号, pp.82-83 ; 第 10 号, pp.76-77 ; 第 11 号, pp.78-79)
- 山本衣美子 (2004) 「いろいろな音楽体験を通して感性を磨こう」第 48 卷 (第 9 号, pp.80-81 ; 第 10 号, pp.74-75 ; 第 11 号, pp.76-77) .
- 山下悠生 (2005) 「だれもが表現する楽しさを味わえるように」第 49 卷 (第 5 号, pp.78-79 ; 第 6 号, pp.78-79 ; 第 7 号, pp.78-79)
- 寄原洋子 (2005) 「和文化の風を向陽に」第 49 卷 (第 12 号, pp.76-77), 第 50 卷 (第 1 号, pp.76-77 ; 第 2 号, pp.76-77 ; 第 3 号, pp.72-73)
- 入山克巳 (2007) 「日本の伝統音楽 (郷土の民謡) に親しもう」第 51 卷 (第 4 号, pp.68-69 ; 第 5 号, pp.70-71 ; 第 6 号, pp.68-69 ; 第 7 号, pp.68-69)
- 古川敏子 (2007) 「日本の伝統音楽 (箏・尺八・和太鼓) に親しもう」第 51 卷 (第 8 号, pp.66-67 ; 第 9 号, pp.66-67 ; 第 10 号, pp.66-67 ; 第 11 号, pp.66-67)
- 佐藤美智子 (2007) 「日本音楽の素晴らしさを伝えたい」第 51 卷 (第 8 号, pp.70-71 ; 第 9 号, pp.70-71 ; 第 10 号, pp.70-71 ; 第 11 号, pp.70-71)
- 宮永典子 (2008) 「和楽器の表現活動を通して, 伝統音楽のよさを味わわせる授業づくり」第 52 卷 (第 12 号, pp.72-73), 第 53 卷 (第 1 号, pp.72-73 ; 第 2 号, pp.72-73 ; 第 3 号, pp.72-73)
- 渋谷政枝 (2010) 「日本の音との出会いを求めて」第 54 卷 (第 12 号, pp.76-77), 第 55 卷 (第 1 号, pp.74-75 ; 第 2 号, pp.74-75 ; 第 3 号, pp.74-75)
- 三輪章人 (2010) 「日本の音楽再発見」第 54 卷 (第 4 号, pp.74-75 ; 第 5 号, pp.74-75 ; 第 6 号, pp.74-75 ; 第 7 号, pp.74-75)
- 森口裕子 (2010) 「日本音楽って素敵」第 54 卷 (第 4 号, pp.70-71 ; 第 5 号, pp.70-71 ; 第 6 号, pp.70-71 ; 第 7 号, pp.70-71)
- 緒方浩二 (2012) 「音楽は生涯の友になるを認識させるために」第 56 卷 (第 9 号, pp.72-73)
- 安次里絵 (2013) 「さくらさくら」第 57 卷 (第 8 号, pp.66-67)